論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	髙橋　茉由
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

「文学体験」論を軸にした文学教育の理論と実践の開発
—西郷文芸学「相変移」論の検討を中心に—

論文審査担当者

主　　査　　教授　難波　博孝
審査委員　　教授　間瀬　茂夫
審査委員　　教授　山元　隆春

〔論文審査の要旨〕

本研究は国語教育における文学教育の現況を踏まえて、次のような研究の目的を掲げ、「文学体験」を軸にした文学教育の理論と実践の開発を進めるものであり、「文学体験」を軸にした文学の授業が効果的な教育方法として国語教育に資することを目指す。

（１）　読者の読みの過程と作品との関係を明らかにし、学習者の個々の読みをどのように扱うかに対する知見を得ること。特に、依然十分に究明されたと言い難い西郷文芸学「相変移」論の内実を考究し、読者の読みの過程と作品との関係を明らかにすることを中心とする。その上で、学習者の個々の読みをどのように扱うかについて論じる。

（２）　学習者が体験的に文学を読む授業をデザインするための実践理論を構築する。

上記の研究の目的を達成するために、以下の方法を用いる。

（１）の目的について

①　国語教育における文学体験論を概観し、整理する。(第１章)

②　西郷文芸学「相変移」論の内実を明らかにし、読者の読みの過程と作品との関係を究明する。(第２章)

③　12 を踏まえて、西郷文芸学「相変移」論の成果と課題を示した上で、課題を乗り越えるために他の理論を援用する(第３章第１、２節)。

（２）の目的について

④　3 を踏まえて実践理論を構築する。(第３章第３節)

⑤　4 にて構築した実践理論を用いて実践を行い検討する。(第４章)

⑥　5 の実践の課題を乗り越えるかたちで実践を行い検討する。(第５章)

⑦　56 の実践を踏まえて、実践理論を再構築する。(第６章第１節)

⑧　実践理論をもとにした教育現場での実践可能な場面を考察する。(第６章第２節)

⑨　これまでの研究の成果と課題、展望をまとめる。(終章)

本論文の構成は以下の通りである。

序章　研究の目的と方法
第１章　「文学体験」論を軸にした文学教育の成果と課題
第２章　「相変移」論の成立過程
第３章　「文学体験」論を軸にした文学教育の実践理論
　　―「相変移」論の成果と課題を踏まえて―
第４章　新しい「文学体験」論構築に向けた「水仙月の四日」の実践
第５章　新しい「文学体験」論構築に向けた「白いぼうし」の実践
第６章　新しい「文学体験」論
終章　研究の総括と展望

本研究の意義は次の２点である。

一点目は、本研究は、西郷文芸学「相変移」論の内実を究明することを通して、読者の読みの過程と作品との関係を次のように明らかにしたことである。

作家が作品創造の際に、作品内の様々な人物になって(「相変移」して)作品をつくることは「視点」を設置することであると考えることによって、作品内の様々な人物は、作家の体験を基盤とした共通性をもっている形象であると同時に、作品の人物の固有の存在として差異性をもった形象として設置されている。このような過程を経て作品がつくられているから、読者は作品に配置されてある人物になって視点を重ねることが可能であると同時に、それらの人物が作家の体験を基盤とした共通性によって繋がっている形象であることから、読者は様々な人物に相互に「相変移」していき、それらを重ね合わせる文学体験が営まれることを明らかにした。

二点目は、体験的に文学を読む授業をデザインするための実践理論を構築することと共に、理論を構築することができたことである。2 つの実践を行い、実践理論を再構築し、学習者の個々の読みを「相変移」を促進するものとして扱い、また、学習者の個々の読み自体を学習材とすることで、文学を読む価値と学習者の個々の読みとの関係を示すことができた。さらに、特別の教科道徳の授業にも用いることができることを示し、文学の読みにとどまらない、人間の在り方について学ぶことができる理論であるという可能性を示すこができた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　３年　２月　１４日